

土佐清水ジオパーク構想基本計画

[改訂版]



Tosashimizu Geopark Plan

土佐清水ジオパーク推進協議会

2021年4月 改定

目次

| | | |
|----------|---------------------------|-----------|
| 1 | 計画策定にあたって | 1 |
| 1-1 | ジオパークとはなにか | 1 |
| 1-2 | なぜジオパークを進めるのか | 5 |
| 1-3 | これまでの経緯 | 7 |
| 1-4 | 計画の位置づけ | 8 |
| 1-5 | 計画の期間 | 8 |
| 2 | ジオパークとしての価値 | 9 |
| 2-1 | 土佐清水ジオパーク構想の地質的価値 | 9 |
| 2-2 | テーマとストーリー | 12 |
| 2-3 | ジオサイトの整理 | 14 |
| 3 | 土佐清水ジオパーク構想が目指すもの | 15 |
| 3-1 | 地域と住民とジオパークとのつながり | 15 |
| 3-2 | 審査指摘事項の改善状況 | 15 |
| 3-3 | 土佐清水ジオパーク構想の目的と理念 | 18 |
| 3-4 | 土佐清水ジオパーク構想の基本方針 | 18 |
| 4 | ジオパークを進めるために取り組むこと | 20 |
| 4-1 | 取組の体系 | 20 |
| 4-2 | ジオパーク活動資源の保全管理 | 20 |
| 4-3 | ジオパーク資源の活用 | 23 |
| 4-3-1 | 教育活動—地域の担い手を育てる— | 23 |
| 4-3-2 | 経済発展—いかに儲けるか— | 26 |
| 4-3-3 | 活気づくり—魅力を生み出す— | 28 |
| 5 | 計画を進めるために | 30 |
| 5-1 | ジオパークの推進体制 | 30 |
| 5-2 | 各主体の役割 | 31 |
| 5-3 | アクションプラン | 33 |

1 計画策定にあたって

計画の策定にあたって、はじめにジオパークとはどういうもので、なぜ土佐清水においてジオパークを進めるのかを明確にします。そのうえで、日本ジオパークおよび土佐清水における経緯、本計画の位置づけなどを示します。

1-1 ジオパークとはなにか



① ジオパークとは

景観や地質・地形は、惑星地球の進化や私たち人間の歴史の重要な証人であり、将来の持続可能な発展のために必要な人類共通の資産でもあります。ジオパークとは、地域の人々の主体的な活動による地質学的に重要な場所や景観といった「大地の遺産」の一体的な保全と活用を通じて、私たちが暮らす生きている惑星「地球」への理解や意識を高めることで、地域や社会全体の持続可能な発展を目指す世界的なプログラムです。また、そのプログラムを取り入れ、「大地の遺産」を大切にしながら、地球とともに生きる地域のことを指します。

② ジオパークの歴史

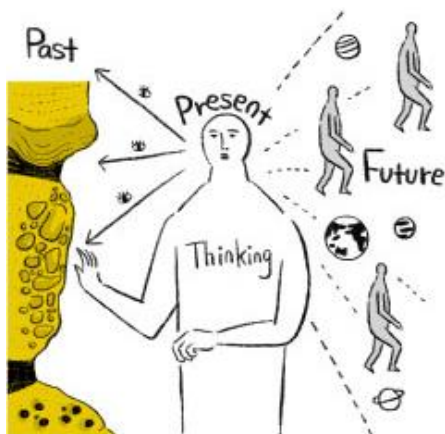
ジオパークの概念は 1990 年代半ばにヨーロッパの地質学者たちによって提唱されました。地球科学的に重要な遺産を保全し、教育や地域の持続可能な発展に活用する取り組みは世界中に広がっていきました。2004 年に世界ジオパークネットワークが設立され、2015 年には、ジオパークは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の正式なプログラムになりました。日本においてジオパークの活動は 2008 年から活動がはじまり、2021 年 3 月現在、世界ジオパーク 9 地域、日本ジオパーク 43 地域が認定されています。

ジオパークの年表

| 時期 | 経緯 |
|----------|---------------------------------------|
| 1990年代半ば | ・ヨーロッパの地質学者たちによってジオパークの概念が提唱される |
| 2000年 | ・ヨーロッパジオパークネットワークが発足 |
| 2001年 | ・ヨーロッパジオパークネットワークとユネスコが提携 |
| 2004年 | ・世界ジオパークネットワークが発足 |
| 2007年 | ・日本ジオパーク連絡協議会が発足し、翌年、日本ジオパークネットワークに発展 |
| 2015年 | ・ジオパークがユネスコの正式プログラムに昇格 |

③ 「大地の遺産」はなぜ大切なのか

地球の活動がつくりだした地質・地形といった遺産は私たちが暮らす惑星「地球」の歴史を教えてくれるものであり、私たち人間の営みの土台となっているものです。私たちが生活する地球のことを知ることは、将来にわたって地球でよりよく生きていくために必要なことです。



地球の記憶は未来への道しるべ

地球は、生きている惑星であり、大地の変動や人間の営みの影響によって絶え間なく変化を続けています。地質や地形には、かつて地球環境がどのように変化してきたかという情報が残されています。大地に残されたメッセージを読み取り、そこから地球の未来を想像することは、将来にわたって地球で生活をするうえでの大切なヒントとなります。

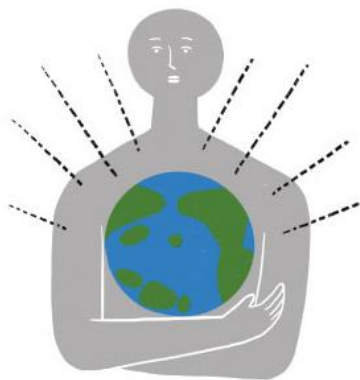
大地の物語を感じよう

地球の営みによってできた大地は、豊かな生態系や私たち人間の暮らしの礎です。私たちを取り囲む様々なものが大地に根差し、相互に関わりながら、地域ごとに独自の景観や文化をつくりだしてきました。大地との関係性を理解することは、それぞれの地域の「らしさ」を守り、多様性のある世界を築くことにつながります。



大地が教えてくれる未来を作る思考方法

大地の遺産を通じて、地域や地球そのものへの理解を深めることは、多角的なものごとの見方や時間や空間を超えた思考方法を身に付けることの一助になります。これらの技術や地球目線の価値観を身に付けた人材は、地域や社会の持続可能な発展のために大きな役割を果たすことになるでしょう。



④ ジオパークをより理解するためのキーワード

前述したように、世界ジオパークはユネスコの正式プログラムとなっており、「世界ジオパークガイドライン (UGGp ガイドライン)」に沿って進められています。日本ジオパークを目指す土佐清水においても、このガイドラインに沿った取り組みが求められています。そのうえで必要となるキーワードについて以下に説明します。

・ユネスコとは

ユネスコとは、国際連合教育科学文化機関のことです。英語で表わすと United Nations (国連) Educational (教育の), Scientific (科学の) and Cultural (文化の) Organization (機関) で、それぞれの頭文字をとって“UNESCO”となります。ユネスコ憲章の前文には、主に次のような内容が書かれており、ユネスコの理念や精神が述べられています。

- ・戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習や生活を知らないことは、人民の間に疑惑と不信をおこし、その不一致がしばしば戦争となった。
- ・文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育は、神聖な義務である。
- ・政治的及び経済的な取り決めのみに基づく平和は永続する支持を確保できる平和ではなく、平和が失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かれなければならない。
- ・世界の人々の教育・科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的である国際平和と人類共通の福祉という目的を推し進めるために、ユネスコを創設する。
(ユネスコ憲章前文より抜粋)

ジオパークはユネスコのプログラムであり、共通の理念を持つものです。ジオパーク活動は、国際平和と人類共通の福祉という普遍的な目的につながっています。

・持続可能な発展とは

ジオパークを進めるうえでの大切な理念に「持続可能な発展¹」があります。様々な場面で使われている言葉ですが、その概念は少しわかりにくいかもしれません。将来にわたって持続的に発展を続けるという意味として捉えられてしまっていることもあります。本当の意味は以下のとおりです。

「持続可能な発展」は将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズを満足させるような社会づくりのことを指した概念です。環境の保全と経済の発展、社会の発展、これらの要素を互いに負荷をかけず、調和を保ちながら充実した状態を将来にわたって、維持し、発展させていくものです。

1987年の国連の「環境と開発に関する世界委員会」（通称：ブルントラント委員会）の報告書で、初めて提唱されました。当初は、環境問題からスタートしたものでしたが、現在では、貧困や平和、人権、ジェンダー、保健・衛生などあらゆる分野において、将来の世代のニーズに配慮しながら、地球規模の問題解決を行うことが必要と考えられています。

「持続可能な発展」は誰にとっても平和で安定した社会を築くこと、そして、将来の世代にもそれが続いていくような社会を作っていくという、世界の人々にとって普遍的な理想を目指すものです。そのための世界共通の目標として、「持続可能な開発目標（SDGs）」が2015年の国連サミットで採択されました。SDGsは、国際社会だけでなく、地域や民間企業、そして個人、とあらゆるレベルでの行動が求められており、土佐清水ジオパーク構想でもSDGsの目標に寄与する活動を推進していくことが必要です。

¹ Sustainable Development を「持続可能な開発」と訳すことも多いですが、ここでは「持続可能な発展」と訳しています。

※計画文の中でいう「持続可能な発展」の意味合いは、ここで記しているように地域だけの発展ではなく、国際的な課題解決も行いながら、よりよい社会を作っていくことも含まれています。

1-2 なぜジオパークを進めるのか

① 土佐清水をとりまく状況とジオパークを進める背景

土佐清水市において最大の課題である過疎化や少子高齢化などの人口問題は、地域の活力の低下を招き、経済活動をはじめコミュニティの維持のほか自然景観の保全や地域文化の継承などに深刻な事態を招いています。

また、社会情勢や地球規模の環境問題などは地域社会にも大きな影響を与えており、将来にわたってよりよい社会を作っていくためには、地球規模の課題に対し、持続可能な開発目標（SDGs）の実践など、行政や民間企業、地域コミュニティ、そして個人などあらゆる段階で行動を起こすことが必要です。このような活動や行動の核としてジオパークを位置づけています。

・産業の状況

土佐清水市は、古くより鰹漁等の漁業が盛んな漁師町として栄えてきましたが、1955年の国定公園の指定を契機に足摺・竜串地域を中心に観光開発が行われ、1972年に国立公園となり、観光が地域の主要産業となりました。しかし、近年の観光ニーズや旅行スタイルの変化に伴い、観光客は次第に減少していきました。また、少子高齢化や人口流出によるまちの活力の低下に伴い、魅力ある観光地を維持させるための人材や資金といったリソースが不足し、施設の老朽化や景観の維持などが困難になっている事例などが多く見られます。2020年夏には新・足摺海洋館 SATOUMI がオープンし、竜串周辺は賑わいを見せましたが、地域経済の持続性を考えると、周辺施設や体験メニューの充実や地場製品の販売など、来訪者の満足度向上や滞在時間の延長など地域への波及効果を高める施策が必要です。

これまで地域を発展させてきた漁業においては、担い手不足のほか、海域の環境変化や漁業資源の減少などの影響から漁獲が不安定な状況にあり、伝統産業である宗田節についてもこれらの要因から原魚の安定的な確保が難しくなっています。地域産業は、地域内のリソース不足といった要因だけでなく、地球環境や社会情勢の変化といったグローバルな要因にも大きな影響を受けています。

・地域資源の保全の状況

土佐清水には、特異な地質・地形、豊かな生態系、そして各地域に伝わる伝統文化などが残されています。しかし、それら地域資源の価値を評価し、啓発する博物館や郷土資料館といった施設がなく、一体的な情報の整理や発信が不十分であり、地域住民が自分たちの地域の価値について知る機会もあまり多くありませんでした。地域資源の価値の評価や情報整理が充分行われていないと、本来の価値を見極めた有効な活用が行われず、地域の活力の低下につながってきます。

地域資源の保全のためには地域の人たちの関わりが不可欠です。足摺岬のヤブツバキ林の

再生や竜串湾のサンゴの保全、また、地域のお祭りなど伝統文化も地域住民の主体的な活動により維持されています。しかし、これらも産業同様に担い手不足が深刻な課題となっています。

このほか、大規模な開発なども、地質遺産をはじめとする自然景観や環境、住民の生活に大きな影響をもたらします。地域で大規模な開発が計画される際には、住民が自ら考え、関係者とともに地域にとって適切な開発の在り方を議論していくことが、地域資源の保全の観点からも求められています。

地域資源は土佐清水らしさをつくり出している「土佐清水アイデンティティ」の根源となるものであり、将来にわたって土佐清水らしさを残していくためにもその価値を知り、守り、活用する取り組みが必要不可欠です。

・自然災害等のリスクへの対応

近い将来必ず起こるといわれている南海トラフ地震や、台風や豪雨災害などの自然災害についても防災・減災に対する意識向上などソフト面での取り組みが喫緊の課題です。また、このような自然災害のリスクは地球温暖化など環境の変化により増大していることもあり、地球規模の視点でリスクを減らす取り組みも求められています。

このほか 2020 年から世界中で猛威をふるっている新型コロナウイルスのような感染症など、想定外の危機はいつどのように起こるかわかりません。このような危機に対応するためには、リスクを分散させることや様々な状況にしなやかに適応できる地域づくりが求められています。

② ジオパークを進める理由

ジオパークは、地球科学の視点から大地やそこに成立した生態系、その中で紡がれてきた地域固有の歴史や文化の価値を明らかにし、守り、活用することで、その地域らしさを将来に残し、持続可能な発展を目指す包括的なプログラムです。これは、土佐清水の地域課題の解決のためには、とても有効なものだと私たちは考えています。

土佐清水においてジオパークに取り組む最大の目的は土佐清水のまちのよりよい未来をつくることです。土佐清水では人口減少が大きな課題としてありますが、「人口減少」がすなわち「地域の活力の低下」とならないような取り組みが必要となってきます。そのためには、地域を支える「人」が重要なカギとなります。ジオパークの活動をする中で、育まれた人材は、地域や社会にとって大切な財産となるでしょう。また、国際的で総合的なプログラムであるジオパークは、複雑化し大規模化する課題と向き合い、さまざまな主体と連携して課題解決に取り組むことができる場です。「人」がその人らしく活躍しながら、ジオパークを活用しつつ課題解決を図っていくことで、新たな価値が生み出され、まちは輝きを増し、よりよい未来をつくり出すことができるはずです。私たちはこのような希望を込め、未来を創造する「人づくり」をジオパーク活動の柱とし、推進していきます。

土佐清水ジオパーク構想では、目的達成のため、以下の方針を掲げます。

- | | |
|----------------------------------|---------|
| ■ 土佐清水らしい自然や文化、暮らしを守る | 【保全】 |
| ■ 自分たちが暮らす地域と地球の価値を知り、人を育む | 【教育】 |
| ■ 地域資源を活用して、関係人口を増加させ、地域経済を循環させる | 【経済発展】 |
| ■ 住民が自信と誇りを持ってジオパーク活動を実践する | 【活気づくり】 |

1-3 これまでの経緯

日本においては2008年にジオパークの活動が始まりました。土佐清水では、2012年頃、観光入込客数の減少等に危機感を募らせた観光事業者等から「ジオパークを目指してはどうか」という声がありはじめました。そして、2014年に日本ジオパークの認定を目指して土佐清水市観光商工課内にジオパーク推進係が設置されました。2015年には「土佐清水ジオパーク推進協議会」が設立され、様々な関係主体が協働連携してジオパーク活動を推進しています。

2014年の活動開始から4年目の2017年に、「日本ジオパークネットワーク加盟申請書」をとりまとめ、審査に臨みましたが、認定は見送られました。翌年、再チャレンジするも、後述する課題と理由とともに認定は見送られました。その後、課題解決を進め、2020年3月にはジオパークの拠点施設でもある「足摺宇和海国立公園 竜串ビジターセンターうみのわ」がオープンするなど、活動の幅を広げながら、ジオパーク活動を少しずつ土佐清水に根付かせてきました。活動の中でジオパークに対する期待の高まりもあり、今後も活動を継続し、日本ジオパークネットワークへの新規加盟を目指しています。

土佐清水ジオパーク構想の経緯

| 時期 | 経緯 |
|-------|---|
| 2007年 | ・[12月] 日本ジオパーク連絡協議会設立（13地域：地域団体） |
| 2008年 | ・[5月] 日本ジオパーク委員会（JGC）発足（審査団体） |
| 2009年 | ・[5月] 日本ジオパークネットワーク（JGN）設立（日本ジオパーク連絡協議会は発展的解散） |
| 2010年 | ・[8月] 特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク設立。第1回JGN全国大会開催 |
| 2014年 | ・[4月] 土佐清水市産業振興課内にジオパーク推進係が設置される ・[5月] 日本ジオパークネットワーク準会員となる |
| 2015年 | ・[2月] 土佐清水ジオパーク推進協議会設立 ・[4月] 土佐清水市観光商工課内にジオパーク推進室が設置される（昇格） ・[11月] 世界ジオパークがユネスコの正式事業として認定 |
| 2016年 | ・[4月] 土佐清水ジオパーク構想推進計画策定 土佐清水ジオパーク構想ジオサイト保全整備計画策定 |
| 2017年 | ・[4月] 土佐清水ジオパーク構想を日本ジオパークへ加盟申請 ・[6月] 土佐清水ジオパーク構想の2017年の認定見送りが決定 ・[7月] 土佐清水認定ジオガイドの会、発足準備 |
| 2018年 | ・[3月] 土佐清水ジオパーク構想基本計画策定 ・[7月] 現地審査 |

| | |
|-------|--|
| | ・[9月] 土佐清水ジオパーク構想の2018年の認定見送りが決定 |
| 2019年 | ・[3月] 土佐清水ジオパーク構想の2019年の申請見送りを総会で決定 |
| 2020年 | ・[1月] 国立公園*ジオパーク推進課が設置され、事務所が竜串ビジターセンターに移転 ・[3月] 足摺宇和海国立公園竜串ビジターセンターがオープン |

1-4 計画の位置づけ

本計画は、土佐清水ジオパークの推進に係る最上位計画として位置づけます。本計画は協議会が策定するものですが、ジオパークの推進は土佐清水市の政策としても重要な位置づけにあります。したがって、本計画は土佐清水市の総合計画および関連部門計画との整合を図りながら進めていくこととします。



また、ジオパークの活動はユネスコプログラムでもある世界ジオパークの活動に準拠していることから、世界ジオパーク作業指針や国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」などとも整合性を図り、共通の理念に向かって進めるものです。

1-5 計画の期間

本計画は、土佐清水ジオパーク構想の目指す姿を明らかにし、それに向けた取り組みの方向性を示すものです。計画期間は2018年度から2022年度までの5年間としていますが、日本ジオパークの申請状況や審査結果や地域での活動状況などを踏まえ、状況に応じて適宜見直しを行っていきます。

2 ジオパークとしての価値

土佐清水市の大地は、大きく4つの時代に形成されました。これらの地質・地形から生まれたジオサイトや、地域固有の歴史・文化などのつながりを楽しみながら学べる「ジオストーリー」について示します。

2-1 土佐清水ジオパーク構想の地質的価値

(1) 土佐清水ジオパーク構想の大地

土佐清水の大地は、大きく以下の4つの時代に分けられます。



3800 万年前～ 深い海の記憶

日本列島が、まだユーラシア大陸の端にあった時代、海洋プレートの沈み込みによって深い海の底にたまった砂や泥、火山島の一部が陸側に押し付けられました。こうしてできた地層を付加体といい、日本列島の土台となっています。土佐清水の大地の土台も、約3800万年前以降にできた付加体です。そして、プレートの沈み込みは今も続いています。



1700 万年前～ 浅い海の記憶

日本列島が、大陸の端から離れ、現在の位置まで急速に移動していた頃、大地は激しく変動していました。三崎地区に分布する三崎層群は、活発に隆起していた山地から運ばれてきた大量の砂や泥が浅い海や河川に堆積したものです。地震や海底地すべりによって変形した地層が、激動の時代を物語っています。この大地の変動は、当時の生き物にも影響を与えていたと考えられています。



1400 万年前 マグマの記憶

活発な大地の変動は、現在は火山のない太平洋側でマグマの活動を引き起こしました。約1500万年前から始まったこのマグマ活動は大地を盛り上げ、太平洋に向かって突き出す岬のもととなる地形を作ったとも言われています。足摺岬の花崗岩は、マグマの活動も終わる頃の1300万年前にマグマが地下深くで冷えて固まったもので、その後も続く大地の隆起によって、現在は地表に顔を出しています。



～現在 暮らしと大地の営み

土佐清水は、現在もプレートの沈み込みによる変動や、堆積、風化・侵食といった大地の営みが活発な場所です。こうして生まれた地質や地形は黒潮と出会うことで、豊かな漁場、人や文化を運ぶ海流、そして温暖湿潤な気候といった恵みを土佐清水にもたらし、独自の暮らしや文化を育んできました。

(2) 土佐清水ジオパーク構想の地質的特性

土佐清水の地質学的特徴は日本海拡大期の前弧域（海溝側）で生じていた、きわめて活発な大地の変動を記録する地質体が存在することです。

4つのプレートのせめぎあう、世界有数の地震・火山大国として知られる日本列島。しかし、日本海が急速に拡大し、ユーラシア大陸から切り離された時代の日本列島は、現在よりもはるかに大地の変動が活発だったと考えられます。土佐清水に分布する三崎層群と足摺岬花崗岩体は、日本列島の形成史の中で最も重要な事件の一つである日本海拡大が、その最前線であった日本海沿岸地域以外にどのような影響を与えたかを知ることができる重要な地質体です。

①三崎層群に見られる地層

竜串海岸に代表される三崎層群では、日本海拡大期の活発な大地の変動の影響を受けた海底やそこに棲息した生物の様子などに触れることができます。三崎層群は、日本海拡大にともない、西南日本が急速に回転移動をしていたとされる約1700万年に堆積しはじめた浅い海から川にかけての地層が、付加体である清水層を不整合に覆っています。三崎層群には、地震にともない海底地すべりや液状化現象によって変形した地層や、津波によってできたと考えられる堆積物が数多く含まれており、当時の活発な地殻変動を物語っています。また、保存状態はいいものの、多様性の低い密度の小さい生痕化石群集が見られるのも三崎層群の大きな特徴の一つで、これは、四国山地周辺における断層運動や花崗岩マグマの上昇にともなう隆起によって多量の碎屑物（風化侵食によって細かく砕けた礫、砂、泥など）が生産され、前弧海盆（海溝に堆積した土砂がプレートの沈み込みによって陸側に押し付けられた結果、陸から運ばれてくる土砂をせき止める高まりが形成されることでできた海底の盆地）に供給された結果であると考えられています。土佐清水では、三崎層群がよく露出している松崎・落窪海岸、千尋岬、竜串海岸、弁天島、爪白海岸といった地質・地形サイトにおいて、活発な地殻変動の影響を受けながら前弧海盆が埋め立てられていく過程を追うことができます。そのため、安定大陸（先カンブリア時代に造山運動を受けたが、それ以降は造山運動がなく安定している地域）と比べて研究が進んでいない日本列島のような変動帯における古環境や古生態のモデル地として注目されています。また、日本海拡大期の活発な地殻変動の影響を受けてできたということは、逆に当時、地下深部でのマグマの形成などの火成活動や地殻変動の詳細を知る手がかりになるということでもあり、そういった分野からの研究も進められています。

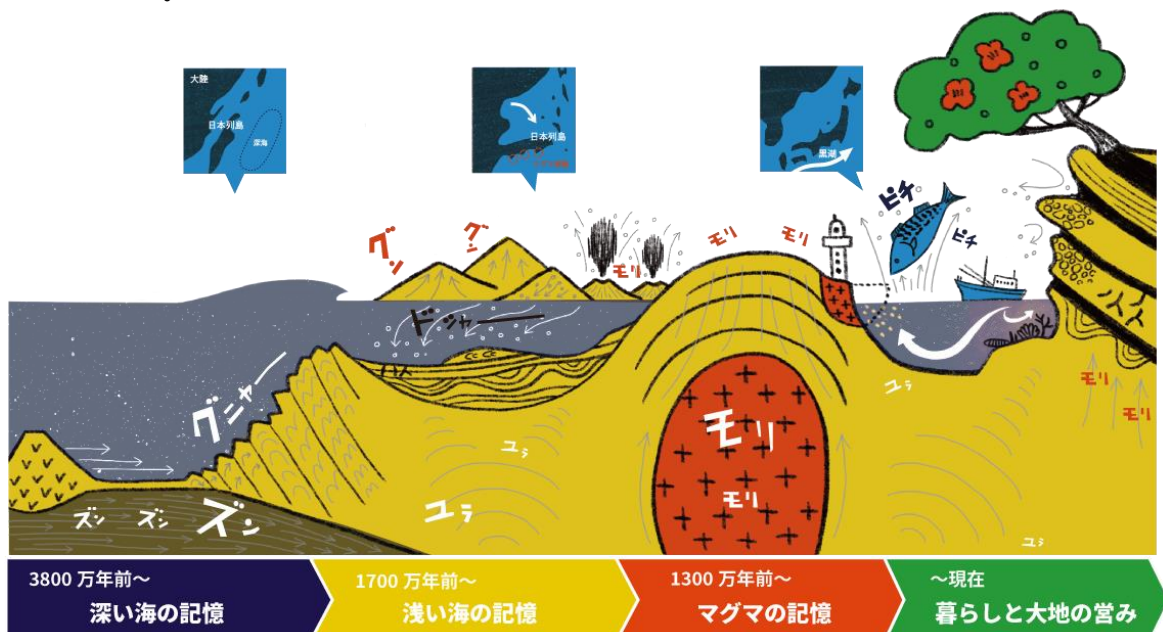
②足摺岬花崗岩体

一方、足摺岬花崗岩体では、日本海の拡大に関連したマグマの活動の証拠を通じて、地下深部の環境に触れることができます。足摺岬花崗岩体は、日本海拡大終了直後の約1600

～1300 万年前に、西南日本の前弧地域（現在の西日本太平洋側、足摺岬はじめ、紀伊半島、室戸岬等）に生じた火成活動によって形成された火成岩体の一つです。これらの火成岩体は、若く暖かいフィリピン海プレートが日本海拡大にともなって強制的に沈み込むことで生じたと考えられてきました。近年では、これらの火成岩体の形成によって、日本海の拡大が抑制・停止されたとも考えられています。また、足摺岬や室戸岬、紀伊半島といった太平洋側に突き出す半島地形や、西日本最高峰の石鎚山を含む四国山地は、この時の火成岩体の浮力によって隆起したことで形成されたという説も提唱されており、現在の地形にも大きな影響を与えている可能性があります。

足摺岬花崗岩体は、成分が異なる複数種類の花崗岩が同心円状に分布する様子や、花崗岩マグマの中に何度も玄武岩質マグマが注入されたことでできた様々な構造、清水層が熱を受けることでできたホルンフェルスなど、地下深部のマグマだまりで生じていた現象について知ることができます。その一方で、足摺岬花崗岩は日本のような沈み込み帯ではなく、大陸内部で生じることが多いアルカリに富むAタイプ花崗岩であり、どのように形成されたかはいまだに不明です。また、カルデラを形成していた（噴火した）という意見もある一方、規模が小さいので浮力が弱く、地表まで到達できなかったとする説もあるなど、謎の多い花崗岩です。しかし、それゆえに多くの研究者が訪れるまさに地球科学研究の最前線ともいえる場所となっています。

このように、土佐清水では、三崎層群や足摺岬花崗岩体といった日本海拡大の激動の時代に形成された地質体に加えて、それらの地質体の基盤となっている付加体や隆起地形、激しい風化侵食の結果生じた地形など、様々な時空間スケールで変化する大地の様子を見ることができます。変動する日本列島の姿を端的に示すとともに、私たちが暮らす変動帯・日本列島がどのような場所で、どのようなことが起こり得るか、考えることのできる場所です。



土佐清水の大地の成り立ち

※土佐清水の大地は、過去、現在、そして未来が関係性を持って変化し続けている。このイラストでは、想像力をふくませることを重視しており、情報をぶつ切りにせず、一体的に表現している。そのため、空間的・時間的な配置が現実と異なる表現もある。

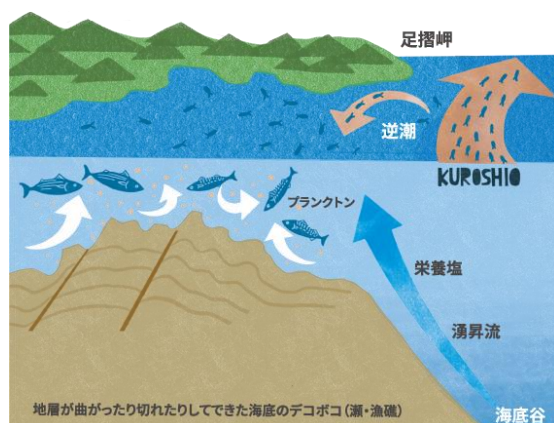
2-2 テーマとストーリー

土佐清水ジオパーク構想では、黒潮と大地の出会いから、私たちの住むまちの暮らしや歴史を紐解き、海とともにある暮らしを伝えていくため、テーマを「**黒潮と共に生きる**—漁師が生まれる大地の物語」と設定します。

—黒潮と共に生きる— 漁師が生まれる大地の物語

土佐清水を語るうえで欠かせない要素が海、特に黒潮です。黒潮が大地と出会うことで、土佐清水の生態系、海流、多様な海と共に生きる暮らし、文化が育まれてきました。土佐清水では黒潮と大地の変動と海が影響しあうことで、生活の場そのものも生み出してきました。平地の少ない土佐清水、特に足摺半島地域では、小高い場所にある平坦地である「駄場」が居住地や農耕地として利用されてきました。「駄場」の大部分は海成段丘であり、地震隆起と気候変動にともなう海水準変動によって形成された地形です。つまり、人々の暮らしの根幹に大地と海との相互作用があります。

そして、この土佐清水の海を特徴づけるのが「黒潮」です。この地では、黒潮が大地と出会うことで、生態系、海流、多様な海と共に生きる暮らし、文化が育まれてきました。



図：海底地形と漁場の形成



図：黒潮の反転流

黒潮と文化の伝来

長い歴史を有する日本の出汁文化を支えてきた鰹節や宗田節をはじめとする漁業文化はその好例です。江戸時代の土佐清水は、全国でも屈指の品質を誇る鰹節の産地として知られていました。その技術が現代に引き継がれているのが宗田節です。この節作り文化が発展した要因は、大きく2つあります。1つは近海にある優れた漁場です。黒潮が土佐清水に接近すると、陸棚斜面を駆け上がる湧昇流が生じて太陽光が届く海面付近に豊かな栄養塩を運び、土佐清水近海に好漁場が形成されます。2つ目は、海路の存在です。黒潮が足摺岬、室戸岬、紀伊半島といった太平洋に突き出す岬にぶつかると、逆潮（反転流）と呼ばれる岸に沿って西方向に流れる海流が生じます。鰹漁や鰹節作りの先進地であった紀伊半島の漁師が、これらの海流を利用して足摺半島近海へ進出した際に、鰹の好漁場を発見し、節作りの製法を土佐清水に伝えまし

た。このことが、土佐清水の漁業に大きな発展をもたらすことになりました。また黒潮や逆潮は太平洋での航海にも利用され廻船業が発達することとなり、さらに内陸部でも、節を燻すのに用いる薪（ボサ）や、輸出用の木炭の生産のため、林業が営まれてきました。

清水さばを育む海底地形

近年では、ゴマサバ（ブランド名：土佐の清水さば）が新たな特産品となっています。回遊魚であるゴマサバは、黒潮流域で生まれ、夏の間は北上して三陸や北海道沖で成長し、冬～春になると産卵のために南下します。足摺半島沖はゴマサバの産卵海域であり、また成長して回遊しなくなった“瀬付きのサバ”の生息地でもあります。足摺半島沖の海底は、大地の隆起にともなって形成された断層や褶曲が数多く存在し、起伏にとんだ海底地形となっており、これが漁礁の役割をすることで、年中ゴマサバが漁獲できる好漁場となっています。

黒潮と大地が育むサンゴの海

さらに、土佐清水では、三崎層群が分布する竜串・見残し海岸において、波や海水中の塩による風化侵食作用によって奇勝奇岩が生み出され、江戸時代前期の遍路案内書に紹介されて以降、観光名所として知られるようになりました。さらに、風化侵食作用によって複雑な地形となっている竜串湾に暖かい黒潮が流れ込むことで、サンゴ類をはじめとする生物多様性の高い海域が形成され、ダイビングやグラスボート、そして、“里海”たる竜串湾の生物を中心に紹介する水族館などを楽しむため多くの人々が訪れることとなりました。

自然災害と暮らし

大地と海との関係は、良いことばかりではありません。土佐清水のすぐ沖に存在する南海トラフで発生する大地震とそれにともなう大津波は、土佐清水に大きな被害を幾度も与えてきました。また、黒潮がもたらす温暖多雨な気候は豊かな植生を育むと同時に、洪水など水害も起こします。それでも先人たちは、伝承、地名、石碑などで教訓を後世に残しながら、海とともに暮らし続けてきました。

気候変動や、食料など様々な資源の不足、生物多様性の低下、自然災害の発生など様々な課題を抱える現在、地球の表面積の7割を占め、地球システムの基幹とも言える海のことをより理解し、利用の仕方を見直していく必要があります。土佐清水を訪れる人々には、変動帯という変化の激しい土地における海とともにある暮らしを楽しみながら体感してもらい、土佐清水の人々には、あたりまえにあるこれらの存在を再確認し、ジオパークを通じて、海との付き合い方を考える第一歩を踏み出してもらいたいと考えています。

2-3 ジオサイトの整理

(1) 各サイトの概要

土佐清水ジオパーク構想においては、2021年3月現在、25のジオサイト（地質・地形）を選定しています。生物・生態学および文化的な価値が示され、併せてジオサイトと同様に教育的・ツーリズム的価値を有するものを「自然サイト」、「文化サイト」として位置づけ、それぞれ5カ所と4カ所選定しています。34カ所のサイトの特質、サイト位置図はサイトリスト及びサイトマップに整理します。

| サイト名 | 概要 |
|--------------|---|
| ジオサイト（地質・地形） | 地質遺産の中から、保全の対象とするとの観点ともに、教育的価値（現地学習、巡検、学校教育への利用など）や、ツーリズム的価値（アクセスのしやすさ、景観の良さなど）を有するもの。 |
| 自然サイト・文化サイト | 文化的、生物・生態学的価値が何らかのかたち（信頼性のある成果物や実績など）で示され、保全の対象とするとともに、教育的価値・ツーリズム的価値を有するもの。また、ジオストーリーとして、地質・地形サイトと関連させることができるもの。 |

(2) 各サイトの保全状況

土佐清水ジオパーク構想におけるジオサイトおよび自然サイト・文化サイトの多くは、足摺宇和海国立公園区域内に位置し、景観や生態系の保護が行われています。また、国や県・市の文化財指定を受けているサイトも多く、サイトの存続に関する危険性は多くのサイトではそれほど高くありません。しかし、サイトの一部では未だ規制などが設けられていない状態も残されている状況です。また、風化が進んでいる石碑群（文化サイト「自然災害碑群」）や絶滅が危惧される植物（自然サイト「マルバテイショウソウ保全地」）など、喫緊の対策が必要なサイトがいくつかあり、個別の保全計画の策定が急務となっています。

協議会は2017年4月に「ジオサイトの保全整備計画」を策定しました。それに基づき、サイトの保全や看板や遊歩道などの整備について立案し、実施に移していきます。看板や遊歩道などの整備について立案し、実施に移しています。ただし、2021年度が計画の終了年度であること、策定時からサイトの変更があるなど状況の変化を踏まえ、新たな保全計画の策定が必要です。協議会では、令和3年度（2021年）に新たな保全計画の策定を行うこととしています。

本計画では、新たな保全計画策定に向けて、土佐清水ジオパーク構想におけるジオサイトおよび自然サイト・文化サイトの現状を整理します。

現状

協議会ではジオサイトおよび自然サイト・文化サイトの各サイトについて、法規制、地権者、地震・津波の影響、指定範囲、科学的価値、現状を詳細に記録した“サイトカルテ”を作成しています。各サイトは継続的にモニタリングが行われ、カルテの更新が行われています。

3 土佐清水ジオパーク構想が目指すもの

土佐清水構想の課題を整理し、それらを共有・認識したうえで、ジオパークをもって目指す姿を明確にします。また、土佐清水市としてのジオパーク推進に対する基本的な考え方を示します。

3-1 地域と住民とジオパークとのつながり

ジオパークは地域固有の文化を尊重し、讃えながら、ボトムアップにより、地域の皆さんが主導的に実施していくものです。ジオパークでは、地域の文化、コミュニティなどその土地のつながりの重要性を認め、地域の人々の知識や慣習などを取り組みに活かします。

現在、すでに取り組みされている環境保全や地域文化を守る活動、防災・減災活動や清掃活動などもジオパーク活動につながるもので、それらの活動に、地球科学的価値を付与することで、地域と大地のつながりは一層強固なものになります。また、ジオパークを通じて、“Think globally, act locally”（地球規模で考え、足元から行動する）を実践し、グローバルな課題解決を共に考え、地域から行動を起こすことで、地域の地道な活動は、内外に広がっていきます。活動の継続で得られた知見やノウハウをネットワークで通広く共有することで、地域の取り組みが、人を変え、社会全体を変えていくものになるかもしれません。このように、住民の皆さんとともに活動を継続しながらその輪を広げ、そこから「人づくり」につなげていきたいと考えています。

今後、土佐清水ジオパーク推進協議会とその活動理念に共感し、活動を共に行う団体や企業などとパートナーシップを結び、さらに地域に活動を広げていく必要があります。

3-2 審査指摘事項の改善状況

土佐清水ジオパーク構想は、2017年、2018年と2年連続日本ジオパークの認定を目指し、JGCの審査に臨みましたが、まだ日本ジオパークとしての基準には及ばず、見送りとなりました。審査で指摘された事項とその改善状況、そして、現在の課題を整理します。

（1）審査指摘事項

①多様な専門家や研究者との連携

2018年度より「土佐清水ジオパーク構想学術研究支援事業」2019年度より「土佐清水ジオパーク構想活動支援事業」を実施し、エリア内での調査・研究を公募し、事業を通じて様々な分野の研究者と連携を強化してきました。また、エリア内での調査・研究については、ジオパーク推進協議会事務局が窓口となり、専門員が中心に、情報提供や、各種申請書類の手続き、関係者等との調整、調査への同行等を行ってきたこともあり、様々な分野の研究者とこれまで以上に連携ができており、大学等の巡検やゼミ合宿等の受け入れが増えてきています。また、これまでの関わりによりつながりができた研究者には、竜串ビジターセンターでのイベント等で展示の監修や講演をしていただくなど研究成果を地域へ還元していただい

ています。

②分かりやすくかつ科学的適切な文章作り

テーマの設定には、当協議会の顧問のほか、高知大学地域協働学部で地域連携などを行う専門家などにも助言をいただきながら作成しました。また、科学的な事象を可視化するサイエンスデザイナーにも業務を委託し、ジオパークの理念や地質的な価値をわかりやすくイラスト化し、情報整理を行っており、WEB やパンフレット等各種媒体で用いています。

日本ジオパークネットワークの中においても、ジオパークの理念をわかりやすく説明できていないこともあり、これまで、土佐清水において思考してきたプロセスなどはネットワークで共有し、JGN 全体でもジオパークのわかりやすい説明を作るなど、更なる普及を行う必要があります。

③ジオツーリズムの推進

2018 年の審査以降、ジオパーク推進協議会では、竜串ビジターセンターの運営や竜串海洋観光クラスター協議会や観光開発に関わる計画等の策定へ参画してきました。2020 年 1 月には、協議会事務局の「ジオパーク推進室」が「国立公園*ジオパーク推進課」として独立し、事務所を同年 3 月にオープンした竜串ビジターセンターうみのわへ移転し、同施設の運営を行っています。

竜串ビジターセンターでは、土佐清水ジオパーク構想の拠点施設として、ジオパークの紹介やジオツアーをはじめとする周辺の体験メニューの紹介を行っており、ジオツアーはウェブサイトにも掲載し、ビジターセンターのツアーデスクで予約・受付する体制を整えています。

また、2020 年 3 月に竜串エリア 3 ヶ所にサイト解説板を設置し、それと連動する位置情報アプリケーションも導入しており、ジオツーリズムを手軽に楽しめるようにしています。

2020 年 7 月には足摺海洋館 SATOUMI がオープンしたことから、それに合わせたツアーを開発したほか、繁忙期には、ジオガイドによる館内ガイドツアーの販売を行いました。また、地域通訳案内士の資格を持つジオガイドによるインバウンド向けのサイクリングツアーの商品化なども行っています。このように、ジオツーリズムは徐々に広がりを見せているものの、ツアーの実施実績は十分ではなく、ガイドのみの活動で生計を立てることができる状況にはなっていません。今後、ジオツアーの認知度を上げ、実績を増やしていくことで、プロのガイドが活躍できる土壌を作っていくことや、観光事業者や周辺施設、民間企業と連携し、滞在時間の延長や訪問者の消費金額を増やしていく試みを行っていく必要があります。

④防災への取り組み

土佐清水は繰り返し起こる南海トラフ地震や台風等の災害と向き合わなければならない地域です。これまでも、ジオパークでの防災学習に力を入れており、2018 年からエリア内の自然災害碑を文化サイトに指定していました。2018 年の審査では、これらを「文化財保護条例等に基づく指定等を進めることが望ましい」と指摘を受け、それ以降、ジオパークで

はそれらの保全と活用を特に重点的に進めてきました。2019 年度に、市役所生涯学習課、危機管理課、土佐清水市郷土史同好会、土佐清水自然史研究会と連携し、自然災害碑の調査を行いました。2019 年度の調査を踏まえ、2020 年 11 月には、特に歴史的価値の高い大正時代以前の石碑 10 基が「近世近代自然災害碑群」として市指定有形文化財へ登録されました。これらの自然災害碑を活用した学校での防災学習や海洋研究開発機構（JAMSTEC）高知コア研究所主催の 3D モデルを使った自然災害碑についてのワークショップなどを行いました。今後も危機管理課や地域と連携しながら、大地に寄り添った視点からの防災意識の向上を目指しています。

土佐清水は南海トラフ地震や台風、豪雨など自然災害が多い土地であるということもあり、これまでの被災経験から、災害への備えなどのノウハウが蓄積されています。これをネットワークで広く共有することで、日本ジオパークネットワークへ貢献していきたいと考えています。

⑤海域も含めたエリア指定

これまで、陸域のみ申請エリアとしていたが、ツーリズムや保全活動なども海域で実施していることや、貴重な地質的価値を有するジオサイトなども海域にあることから、国立公園及び陸から 1 キロの海域をジオパークエリアとして申請することとしています。

⑥推進体制の強化

2020 年 1 月より国立公園*ジオパーク推進課として独立したこともあり、ジオパークの運営体制は強化されています。2019 年度より地球科学の専門員に加え、生物学を専門とするジオパーク専門員を雇用したことで、幅広い活動が可能となりました。また、ビジターセンターの観光コンシェルジュや自然ガイドのスタッフも運営に加わったことで、これまで 4 名だったのが、8 名と多様な人員体制となり、事務局職員も数年にわたりジオパークに関わることで、ジオパークへの理解を深めることができます。また、顧問 2 名の他に新たに生涯学習課市史編さん室長が郷土史に関するアドバイザーとして就任しているほか、同年 4 月には新たに地球科学の研究者がジオパーク専門員として着任し、これまでの土佐清水ジオパーク構想の蓄積に加え、新たな価値がもたらされることを期待できます。今後も活動を進める中で、研究者や専門家と連携を深め、多様な人材に運営に関わっていただく必要があります。

3-3 土佐清水ジオパーク構想の目的と理念

1章で述べたように、土佐清水においてジオパークに取り組む最大の目的は、黒潮の恵みに育まれた土佐清水の大地、そしてそこに育まれる私たちが愛するこのまちを未来に残し、よりよい未来を目指すことです。地域のよりよい未来の姿とは、その大地とそこに根付く自然、培われてきた歴史や文化、暮らしを守りながら、土佐清水らしく地域が輝く姿です。そのためには、「人」が重要な役割を担います。人口減少に歯止めがきかない中においては、「人口減少＝地域の活力の低下」にならないよう、人口に依存せず地域を活性化する方法が必要です。そのためには、地域を構成する「人」がその人らしく活躍し、自己や社会のよりよい未来のために行動していくことが大切です。

私たちは、ジオパーク活動を通じて、土佐清水の持つ価値を伝え、土佐清水アイデンティティの構築を図ることで、地域を大切に思う人を増やしていきます。そして、地球科学的なスケールで思考し、地域づくりや社会の課題解決に取り組み、新たなステージへ押し上げていく「人」を育てていきます。そのような「人」をつくっていくことこそが、今を生きる私たちが未来のためにジオパークを通じて果たすべき使命です。

これを地域の皆さんと関係者がしっかりと共有するため、以下に土佐清水ジオパーク構想の理念を定めます。

～自然の恵みと知恵を明日へつなぐ人づくり～

この地に暮らす私たちは、ジオパークを通じて大地、海、山、川、生き物、そして風土に根差した暮らしの価値を見つめなおし、その恵みに感謝しながら、土佐清水らしいまちの姿を未来に伝えていきます。足元を見つめ、土佐清水から地球を見つめ、地球から土佐清水を見つめ、一人ひとりが考え、未来のために行動していきます。やがて地域を支え、未来を作る「人」が育まれるように、私たちは、この地でジオパークを進めていきます。

土佐清水ジオパーク構想による人づくりの方針

| 地球科学を土台とした学び | ネットワークや交流による学び | 土佐清水アイデンティティの構築 |
|--|---|---|
| 大地の遺産に触れることで、様々な時空間スケールが存在し、あらゆるものが相互に関係しあっていることを学びます。地球視点・地球規模で物事を考え、現在の地球が抱えている大規模で複雑な課題を自分事として捉え、解決に向けて活動に取り組める人を育てていきます。 | 研究者や専門家との連携、地域内での連携や世界中の人々との交流により、対話や議論の機会を創出します。様々な価値観や知識、背景を持つ他者と交流し、議論をすることで、問題意識を共有し、相互理解を深めたり、アイデアを生み出したたりすることができる人を育てていきます。 | 自分たちの暮らす地域のことを知ったうえで、他の地域についても学び、そこに暮らす様々なライフスタイルや価値観を持つ人たちと交流します。自分たちの暮らす地域の特徴や価値を明確化し、土佐清水アイデンティティを育み、地域を愛し、地域のために行動できる人を育てていきます。 |

3-4 土佐清水ジオパーク構想の基本方針

第1章に示した通り、ジオパークとは、人類共通の遺産である「大地の遺産」を教育や研究、そして、ジオツーリズム等で活用しながら守り、その価値を広く伝えることで、地域及び社会全体の持続可能な発展を目指すものです。土佐清水ジオパーク構想では、この考え方を踏まえたうえで、「人づくり」をジオパーク活動の柱と捉え、以下の方針を定めます。

それぞれの施策については、相互に補完し合いながら、切れ目なく一体的に進められるものです。

■保全

「大地の遺産」をはじめとする地域資源の保全は、ジオパーク活動において核となる重要な取り組みです。地質的価値が認められる場所や、大地とのつながりの上に成り立っている生態系や文化的に重要な場所をサイトとして定め、保全を図ります。モニタリングや調査研究は、関係者との協働・連携をもって実施します。さらに、保全活動のための学びの機会を、住民の皆さんと共につくっていきます。

■活用

(1) 教育活動の推進

ジオパークにおける教育は、郷土愛を育むだけでなく、地球科学的な時間スケールを用いることで、多角的な視点や総合的な思考力・実践力を身に付け、よりよい未来を創造する力を育むものだと私たちは考えています。小中学校等の学習をはじめ、地域住民や来訪者などに土佐清水の自然や歴史・文化を楽しみながら学び、新たな気づきや価値観をもたらす機会を提供していきます。また、学びの機会の増大によって、互いに学び合い、そこから新たな価値や文化を創り出していくことを目指します。

(2) 地域経済の発展

地域資源を活用したジオパーク関連の商品開発やガイドツアー・体験メニューなどに高付加価値を付けることで、観光業や一次産業などの活性化を促すとともに、地域経済を循環させていきます。また、ジオパークに関連する経済活動は、環境や社会に配慮されたものであるべきです。その価値観を多くの企業や団体、個人と共有し、地域を持続可能な形で発展させていきます。

(3) 地域の活気づくり

地域資源の価値を知り、住民が自信と誇りを持ってジオパークに関する様々な活動を実践していくことで、住民主体のまちづくりを行い、地域に活気をつくり出します。また、研究者や専門家や日本ジオパークネットワーク等の多様な人材との交流や協働により、新たな価値を創造し、地域内外でジオパークの存在価値を高めていきます。

4 ジオパークを進めるために取り組むこと

土佐清水ジオパーク構想を進めていくために必要な取組の方向性を示します。ジオパークの推進にあたっては、活動の核である地域の資源の保全と、その資源を活用し、地域の発展につなげることを一体的に行うことが大切です。したがって、ここで掲げる取組の方向性は、「保全」と「活用」の二つの視点から整理し、土佐清水ジオパーク構想を進めていくために必要な取組の方向性を示します。

4-1 取組の体系

前章までに記した本計画の目的と理念、方針、土佐清水ジオパーク構想の課題と取組の体系を示します。

3-1「住民の皆さんとジオパークとのつながり」で述べましたが、本計画において重視すべきは、住民の皆さんが主体的に実施する活動です。したがって、ここに示す体系においても、まず住民の皆さんが主体となる「保全」と「活用」に関する取組を掲げます。環境保全や地域文化を守る活動、防災・減災活動や清掃活動など、様々な取組がジオパークの目的につながっています。

目的

自然の恵みと知恵を明日へつなぐ人づくり

理念

この地に暮らす私たちは、ジオパークを通じて大地、海、山、川、生き物、そして風土に根差した暮らしの価値を見つめなおし、その恵みに感謝しながら、土佐清水らしいまちの姿を未来に伝えていきます。足元を見つめ、土佐清水から地球を見つめ、地球から土佐清水を見つめ、一人ひとりが考え、未来のために行動していきます。やがて地域を支え、未来を作る「人」が育まれるように、私たちは、この地でジオパークを進めていきます。

方針

保全

ジオサイトおよび自然・文化サイトの保全を図ります。保全活動に必要なモニタリングや調査研究は関係者との協働・連携をもって実施し、住民や来訪者らが参加して学べる機会をつくります。

活用

教育活動の推進
ジオパークの学びや研究を通じて新たな気づきや価値観をもたらす機会を提供していきます。学び合いにより、新たな価値や文化をつくりだしていくことを目指します。

地域経済の発展
ジオパークを通じて、地域のブランディングを行います。サステイナブルな価値観を事業者等と共有し、地域経済が循環する仕組みをつくります。

地域の活気づくり
ジオパークを通じて、住民主体のまちづくりや多様な人材との交流・協働を進め、地域に活気をつくり、地域内外でジオパークの存在価値を高めていきます。

4-2 ジオパーク活動資源の保全管理

私たちのまちの「土佐清水らしさ」は、「2-1 土佐清水ジオパーク構想の地質的価値」で述べた大地の営みをベースとしています。ここから派生した価値ある地域資源であるジオサイトおよび自然・文化サイト及び無形遺産等を守り活用していくため、利用のルールづくりや調査研究などを進め、地域が一体となって保全管理していきます。

取組1 各サイトの利用ルールをつくる

- ◆ ジオツアーなどにおける各サイトの利用ルールの明確化
- ◆ 利用ルールの周知活動

第2章に示したジオサイトや自然・文化サイトは、2020年度に見直し、設定したものです。サイトの一部は国立公園法や文化財法により法的な保護のもとにあるものの、一部は明確な規制などがないものもあります。これらの資源は守りながら活かしていくべきものです。特に活用にあたっては明確な利用ルールが必要となります。

不適切な利用や開発により、地域の貴重な自然資源や伝統的な生活文化が破壊されると、土佐清水のアイデンティティは失われ、まち本来の魅力を失うことにつながります。そうなれば、地域の持続可能な発展は難しくなります。土佐清水におけるジオサイトおよび自然・文化サイトについて、全体で適用される共通ルールや個別のフィールド利用にあたって適用されるルール、地域の慣習やしきたりなど、実情に合わせたルールづくりを行います。また、このルールづくりは住民の皆さんをはじめとする多様な主体が協働して作成し、その成果はWebサイトなどを通じて広く周知していきます。

取組2 継続的にモニタリングを実施する

- ◆ 各サイトの定期的なモニタリングの実施とデータの蓄積
- ◆ 学校との連携によるモニタリング
- ◆ モニタリング成果の報告・発表の機会づくり

将来にわたるジオサイトおよび自然・文化サイトなどの適切な保護と保全措置の実効性を担保するためには、各サイトの定期的なモニタリングを欠かすことはできません。

協議会においては、2017年4月に計画・保全部会が中心となって「ジオサイトの保全・整備計画」を策定し、策定期間中に4回のモニタリングを実施して保全状況を調査しています。本計画においてはこれを引き継ぎ、34のジオサイトおよび自然・文化サイトについて、今後2年に1回全サイトのモニタリング調査を実施していきます。実施にあたっては、引き続き計画・保全部会が主導し、住民の皆さんや関連団体などとの連携をもって、将来にわたる保全整備活動に適切に反映されるようデータを記録・蓄積していきます。

各サイトのモニタリング調査は、学校との連携によって子供たちが環境学習を兼ねて実施するものも想定されます。学校の協力を得て継続的にモニタリングを行い、かつその成果を

報告・発表する場をつくることで、楽しみながら地域を学べる機会もつくられており、今後、柔軟にモニタリング体制を構築していきます。

取組 3 ジオパークの調査研究を進める

- ◆ 大学や研究機関との連携強化
- ◆ 調査研究に係る資料の収集および活用
- ◆ 調査研究活動に係る支援

協議会事務局では、2名のジオパーク専門員を配置し、大地の成り立ち、生態系や歴史文化などの整理を行い、顧問や高知大学等の協力のもとジオストーリーの構築を進めてきました。

2018年度以降はエリア内の調査・研究事業を支援する助成制度を設けるとともに、その他の様々な支援などをわかりやすく Web サイト等に示すことによって、様々な分野の研究者との連携を深めることができています。研究の成果は、ジオストーリーの構築に活用するとともに、竜串ビジターセンターでのイベントや教育、保全等のジオパークにかかわる活動に活用しています。地球科学等の科学の振興はジオパークのベースとなる活動でもあるため、今後も多様な研究者等と連携しながら、地域の価値を整理し、ジオパーク活動に活用していきます。

取組 4 住民による保全意識を高める

- ◆ 自然保全活動参画への働きかけ
- ◆ 保全活動定着に向けた PR

国内有数のサンゴの群生地である竜串湾では、2001年の“高知県西南豪雨”や近年のオニヒトデ大発生によるサンゴ食害の危機から再生を目指す「竜串自然再生」の活動がなされ、再生した自然を将来にわたって維持していく取組を継続しています。このほか、地区の住民で構成された「足摺岬の自然を守る会」や「竜串の自然を守る会」による遊歩道などの定期的な清掃や草刈り、住民や観光事業者などによる海岸や浜辺の清掃活動なども行われています。また、大岐の浜や桜浜等の、ウミガメの産卵がある砂浜では、住民によるウミガメ産卵地の保護活動も行われています。

足摺地区のヤブツバキ再生プロジェクトも活発化しており、土佐清水における環境保全の取組は日常に根づいているものといえます。

今後は、土佐清水市全域にこのような活動がさらに広がり定着するように、ジオパークとしての価値を伝え、価値に気づいてもらえるよう、Web サイトやイベントなどを通じた啓発、PR 活動を行っていきます。

4-3 ジオパーク資源の活用

土佐清水ジオパーク構想における地域資源の活用について本計画の推進方針である「教育活動」、「経済発展」、「活気づくり」に沿って整理します。住民の皆さんやあらゆる主体が関わる地域の取組は国際的なプログラムであるジオパークを通じて世界規模の活動につながり、やがて、世界を変える可能性を秘めています。また、地域で行う活動は土佐清水ジオパーク構想の目的である「人づくり」へもつながっています。

4-3-1 教育活動—地域の担い手を育てる—

取組 5 ジオパークを知ってもらう

- ◆ 講演会など普及イベントの継続的な開催
- ◆ イベントや祭りなどへのジオブースの設置
- ◆ 土佐清水ジオパーク構想 Web サイトの充実および関連パンフレットなど広報ツールの活用

土佐清水ジオパーク構想の推進を図っていくためには、まず住民や来訪者の皆さんにジオパークとはどういうもので、自分たちとどういう関わりがあるのかを知ってもらわなくてはなりません。協議会では、これまでにジオパークに関する講演会や体験イベント等を行い、住民の皆さんとの意見交換を行ってきました。また、「産業祭」等のイベントや他のジオパークや博物館等と連携したイベント等でブース出展を行い、ジオパークを PR しています。

しかし、それでもまだジオパークの認知度は高いものとはいえず、2020 年に実施したアンケートでは、“ジオパークを全く知らない”あるいは、“聞いたことがある程度”と回答した方は約 35%でした。したがって、土佐清水ジオパーク構想をしっかりと住民の皆さんに浸透させるために、こういった活動を粘り強く継続するとともに、Web サイトや広報誌やパンフレットなどの情報ツールやメディアを効果的に活用していきます。

取組 6 ジオパーク学習を進める

- ◆ 小中学生の体験学習機会の拡充
- ◆ 教員向けジオパーク研修会の継続と拡大
- ◆ ジオパーク学習プログラムの開発
- ◆ 副読本の有効活用

土佐清水においては、ジオパーク構想ができる以前より、地域の資源や環境などを学ぶ取組が実施されており、ジオパーク構想により、これまでの取組をさらに広げ、より深く学べるようになりました。協議会では、環境省や民間団体、専門家などと連携し、小中学生を対象にジオパーク学習を進めています。

小学生、中学生用の副読本も小中学校理科部会や環境省の協力を得て作成され、これを使

った授業も始まりました。また、児童・生徒だけではなく、教員向けの研修への活用など教育活動は確実に広がりを見せています。

また、市内唯一の高校である県立清水高等学校でも「総合的な学習の時間」にジオパークを取り入れられています。今後は、全教員を対象にした講座なども開催し、副読本や学習プログラムの有効活用を進めるとともに、市外の学校等にも周知を行い、ジオパーク学習の拡充を図ります。

取組 7 関わる人材を増やす・育てる

- ◆ ジオガイド養成講座の拡充
- ◆ 観光関連事業者のスキルアップと連携

(1) ジオガイドの拡充

土佐清水ジオパーク構想における地質遺産や各サイトについての学びの意欲を持った来訪者に対して、そのニーズに応じた学習・体験プログラムや解説が提供できる“ジオガイド”の存在はきわめて重要です。

2021年3月現在22人のジオガイドを協議会において認定しています。ジオガイド団体である「土佐清水ジオの会」のほか、個人のガイドがそれぞれジオツアーの企画・開発を行い、竜串ビジターセンターを窓口として、ツアーの販売を行っています。

しかしながら、ジオツアーで十分な収入を得るまでにはなっていないため、ジオツアーの更なる認知度向上が求められています。そのため、日本ジオパークネットワークでの事例を活用しながら、ネットワーク全体でジオツアーの認知度や価値を高める活動を行っていく必要があります。また、将来にわたってジオツーリズムを産業として確立させるため、若い人材を巻き込みながら、ガイド養成講座を継続し、更なる人材を確保していく必要があります。

(2) 観光関連事業者のスキルアップと連携

土佐清水ジオパーク構想を発展させていくためには、地域の基幹産業である観光業に携わる方々の理解と参画が欠かせません。ジオパークによる経済的な効果を生み出していくためにも、観光に携わる方たちがジオパークに対する知識を習得し、自らが企画するツアーや商品の開発、広報活動などに活かしていく必要があります。また、来訪者に楽しんでもらうためには、ジオサイトのみならず、休憩地や宿泊、飲食など地域をあげた観光地域づくりが求められます。

協議会は、あらゆる業種の団体によって構成されており、観光分野についても連携が始まっており、増加しつつある個人客に対応する取り組みを実施しています。足摺地区においては、宿泊地としての大きなキャパシティがあり、さらには「スターウォッチング」といった独自の体験型観光を実施しています。また、「泊食分離」といった考え方によって、市街地との連携を深めています。夜間イベントによって宿泊を促し、市街地で地域固有の食材を提供

し、翌日には竜串地区でアクティビティを楽しむなど、地区間の連携によってジオパークとしての楽しみ方は大きく膨らみます。

したがって、観光振興とジオパークとしての活用を視野に入れ、ジオパーク勉強会の開催や研修・視察などを実施して民間を刺激し、関係者のスキルアップを図りつつ、ジオパークを活用しながら経済的な価値を創出できる人材を育成していきます。

取組 8 防災・減災意識を高める

- ◆ 災害遺構や防災施設などを活用した啓発の推進
- ◆ 防災・減災を伝える人材の育成

(1) 災害以降や防災施設などを活用した啓発の推進

土佐清水ジオパーク構想の地質・地形や大地の成り立ちに関心を持つことは、自然災害の本質的な理解につながります。昨今では特に南海トラフ地震に対する防災・減災の意識が高まっており、“いつか必ず来る地震”と認識して備えておくことが必要です。また、土佐清水ジオパーク構想には、日本海拡大期の地震や津波、マグマ活動の痕跡といった変動帯で生きていることを強く感じさせてくれる大地の遺産があることから、「生きている惑星、地球」を発信しています。

土佐清水市においては 1946 年の南海地震をはじめ、歴史的に地震や津波のほか台風や豪雨などにより大きな災害を受けています。それらの災害の歴史は地層や地形などでも確認できるほか、それらの記録は石碑や地名、口伝として残されています。これらは、先人が遺してくれた貴重な災害の記録であり、未来への防災メッセージといえるでしょう。

これらの災害遺構や津波避難タワーなどをジオツアーに組み込み、自然災害について学んでいくことも重要な取組となります。今後も遺構や口碑の掘り起こしなどを通じて、防災・減災の啓発を進めていきます。

(2) 防災・減災を伝える人材の育成

災害に対する知恵や教訓は、住民の皆さんに根づくことで初めて、いざという時の的確な行動に結びつきます。そのため、住民の皆さんが災害に対する知識と行動をしっかりと理解することが大切です。協議会は、土佐清水市関係各課および地域の防災組織、郷土史会、専門家などとの協力のもと、ジオパークの知識とともに上述した歴史的な災害遺構および防災・減災のあり方について学び、実践して、地域に伝えられる人材の育成を図ります。

取組 9 ジオ関連商品を売り出す

- ◆ 体験型ジオツアーの造成と拡充
- ◆ ジオパークに関する特産品の開発
- ◆ 地元「食」の販売促進

(1) 体験型ジオツアーの造成と拡充持続可能な観光の推進

土佐清水ジオパーク構想では、ジオパークの理念のもと、「持続可能な観光」及び「責任ある観光」を推進し、大地の豊かさを伝えながら、環境や社会問題への意識啓発など、ツーリストにとって新たな気づきや発見があるガイドツアーや体験・アクティビティの充実を図っていきます。

旅行のスタイルは、これまで主流だった団体旅行から、個人で地域の生活や文化を学び、体験や交流をじっくりと楽しむスタイルに変化しており、旅行者のニーズに応じた観光地域づくりが必要となります。土佐清水においては、山・川・里・海のつながりとそれらを活かした独自の産業と文化、アクティビティなど、見て、触れて、体感できる素材が数多くあります。それらの中にジオストーリーを活用することで、物語性や独自性を際立たせ、多彩なスタイルのパッケージツアーやオプションツアーの拡充と造成を図ります。

協議会は、このような取組を支援するとともに、市担当課との連携を図りながら定期的な市場動向調査を行って来訪者ニーズの把握に努め、Web等による情報発信やOTAを活用し、旅行者や旅行会社に対して、地域一丸となって土佐清水市の魅力をアピールします。

(2) ジオパークに関する特産品の開発

ジオパークを経済的な発展に結びつけていくためには、独自のストーリーを背景とした地域固有の“商品”の開発やブランディングも有効です。その商品が地域の歴史文化的な価値を纏い、商品を通して土佐清水の魅力を感じられることが大切です。

特に地域独自の食は、歴史ある産業や生活に培われた価値を表しやすいものと考えられます。土佐清水市においては、「清水さば」や「宗田節」などがジオストーリーを伴った商品として確立されていますが、このほかにも多様な主体によって補助制度を活用した商品開発も進められました。今後もジオストーリーとともに展開する商品の開発や既存の地場産品への価値づけを推進していくとともに、民間の活動に対する支援を積極的に行っていきます。

(3) 地元「食」の販売促進

地域における「食」の文化は、地域の成り立ちを背景に歴史的な価値を感じることができます。土佐清水においては、その地理的な条件などから、地区ごとの農作物や水産物を使い、具材や出汁などに特有の食文化が残されています。しかし、過疎高齢化が進行し、このよう

な貴重な地域文化は徐々に廃れてきているのが実状です。2017 年に行ったジオ弁当の取組や 2020 年に発行した「地域研究誌アオサバラボ」で郷土料理について取り上げ、産業祭等のイベントで販売を進めました。

また、ジオガイドの会のイベント部では、「ジオ焼き」と銘打った、タコの代わりに貝を使用した新たなメニューも開発して各イベントにおいて販売し、好評を博しています。今後も地域の人たちの知恵を借り、将来的には地域固有の食の可視化や、文化として途絶えないようレシピ本の作成に取り組むなど、地元ならではの「食」の研究および販売促進を図っていきます。

取組 10 地域に賑わいを

- ◆ 竜串地区再開発との連携
- ◆ 広域観光へのジオパークの活用

(1) 竜串地区再開発との連携

竜串地区においては、再開発が行われ、2019 年から 2020 年にかけて「新足摺海洋館」、「竜串ビクターセンター」、「爪白キャンプ場」といった施設がオープンし、現在は駐車場等の整備が進められています。これらの施設のオープンにより、竜串地域は賑わいを見せました。しかし、地域経済の持続性を考えると、更なる体験メニューの充実、地場製品の販売、食の充実など来訪者の満足度向上や滞在時間の延長など地域への波及効果をさらに高める枠組みが求められています。土佐清水ジオパーク構想でも、竜串 VC を拠点とし、各事業者と連携を深め、周辺環境や景観の維持や魅力的なプログラムの作成など持続可能な観光地域づくりを進めていきます。

(2) 広域観光へのジオパークの活用

土佐清水市を含む近隣 6 市町村による幡多広域観光は、幡多広域エリアが経済的に活性化することを目指しています。幡多広域は、2021 年に目指すべき姿として、県外観光客 7 万人以上、観光総消費額 19 億円以上を設定しています。

高知県内においては、室戸ジオパークがユネスコ世界ジオパークとして認定されていますが、幡多地域にとっては初めてのジオパーク構想であり、この活用は幡多地域の観光資源として大きなコンテンツとなり得ます。そのため、幡多地域における観光ルートとして、また、観光客誘致の起爆剤として位置づけられるよう、関係機関および近隣市町村との情報共有を図り、協働・連携して県内外にアピールしていきます。

取組 11 来訪者のための環境を整える

- ◆ 各サイト解説板、エリア案内板などの整備促進
- ◆ 各サイトへのアクセスルートの整備促進
- ◆ インバウンド対応の解説板やパンフレットなどの作成

土佐清水ジオパーク構想への来訪者が実際にどこに行けばどのような内容でジオパークを満喫することができるのか、来訪者が自ら行動プランを立てることができるよう、知りたい情報を即時にわかりやすく伝える環境整備が必要です。

2018 年度には、見どころへの案内および誘導を促し、来訪者に分かりやすく伝えられる解説板の設置について、効果的かつ効率的に整備するよう全体整備計画を策定しました。規格・デザインの統一やユニバーサルデザイン、景観などに配慮していくことを重視するとともに、QR コードなどの普及を促進します。既設案内板の要否と他の主体設置の看板などについては、関係者間でしっかりと調整し、土佐清水ジオパーク構想の魅力を顕在化させるプランを立案・実施していきます。

さらに、各ジオサイトへのアクセスルートについても一つひとつ検証し、来訪者が安心して楽しむことができるよう、必要に応じて整備を実施します。また、土佐清水市においてはインバウンド観光が増加傾向にあるため、各種サインはもちろん、外国人向けパンフレットなども作成します。

4-3-3 活気づくり—魅力を生み出す—

取組 12 情報を発信する

- ◆ Web サイト、SNS、広報誌などによるジオパーク情報の発信
- ◆ 土佐清水ジオパーク構想 PR のためのイベント参加

情報発信においては、「土佐清水ジオパーク構想」を知ってもらおうということはもちろん、ジオパークの本質的な面白さを魅力的に伝えていくことが重要です。ジオパークを目指しているということや、地球科学的事象のみを伝えるのではなく、大地の遺産と私たちの暮らしとの結びつきや地球科学の壮大なスケールを感じられるような見せ方、何かの気づきを与えられるような情報を発信していきます。情報発信のツールとして、Web サイトの活用や、SNS、広報誌、マスメディア等も活用していきます。Web サイトについては、見やすさ、読みやすさに配慮し、土佐清水の魅力やジオパークの面白さを広く世界中に伝えられるよう鮮度の高い情報を高頻度で更新し、ジオツアーや教育プログラム、地域の魅力的な情報を積極的に発信します。

取組 13 活動の拠点をつくる

- ◆ 活動拠点としての竜串 VC との連携
- ◆ フィールドに誘う仕組みづくり

2020年1月に新たに国立公園*ジオパーク推進課が設置されました。同課は、同年3月にオープンした竜串ビジターセンターの管理運営を行っています。竜串 VC は、土佐清水ジオパーク構想の拠点施設として活用されています。館内にはジオパークの展示や大地の成り立ちを解説するプロジェクトマップが設置されています。また、竜串 VC では周辺のアクティビティの情報発信や申し込みの受け付け、ジオツアーの拠点としての機能も併せ持つことから、まさにジオパークというフィールドに誘う役割も担っています。今後も環境省はじめ関係機関、周辺事業者と連携しながら、より有効な活用について検討していきます。

取組 14 仲間を増やす

- ◆ 国内外のジオパークとの連携促進
- ◆ 近隣ジオパークとの共同イベントの開催
- ◆ ジオパーク関係者との交流イベントへの参加
- ◆ 国内外のジオパークとの連携促進
- ◆ 近隣ジオパークとの共同イベントの開催
- ◆ ジオパーク関係者との交流イベントへの参加

土佐清水ジオパーク構想の実現に向けては、国内外のジオパークに学び、交流していくことが大切です。日本ジオパーク全国大会への参加をはじめ、先進ジオパークの研修および情報交換を積極的に行います。特に室戸ユネスコ世界ジオパーク、四国西予ジオパーク、三好ジオパーク構想といった近隣のジオパークとは密な協力体制を構築し、四国全体のツーリズムの相乗効果を高めていけるよう、共同シンポジウムの開催などを検討するほか、情報および人材交流の強化を図ります。また、ジオパークに係る研究者や関係者を外部から招聘して勉強会などを開催し、交流できる“仲間”を増やしていきます。

加えて、「取組 8」で示したように、防災・減災を伝える人材を育成しつつ、JGN を利用して防災・減災意識を広く浸透させ、ジオパーク全体の活性化にも寄与します。

5 計画を進めるために

本計画の実効性を高めるため、ジオパーク構想の推進体制を記すとともに、協働・連携する主体の役割を明確にします。また、各取組のアクションプランとして関わる主体および時期を示し、計画の可視化を図ります。

5-1 ジオパークの推進体制

(1) 協議会

土佐清水ジオパーク構想は、現在、2015年2月に設立された「土佐清水ジオパーク推進協議会」が中心となって進めています。現在、土佐清水市および市内の教育、観光、住民組織など39の関係機関や民間団体などによって構成され、事業計画や予算計画など、重要な案件を決定する「総会」が開催されています。

協議会の組織は、会長・部会長らで構成され、ジオパーク推進に関する企画・運営事項を協議する「役員会」のほか、4つの「専門部会」が協議会の中に、「顧問」と「学術アドバイザー」「協力機関」が外部に位置づけられています。

(2) 専門部会

協議会には、取組に関してテーマに沿った内容を協議・実行する以下の4つの部会が位置づけられています。

- ◇計画・保全部会
- ◇教育・啓発部会
- ◇観光・ビジネス部会
- ◇地域コミュニティ部会

各部会は表に示す団体で構成され、協議会の様々な取組に関して各部会の設置テーマに沿った内容の協議・実行の中心的な役割を担っています。これまでに、計画・保全部会では保全計画策定のための現地調査、教育・啓発部会では中学生用副読本の内容検討、観光・ビジネス部会ではジオガイドによるツアー体験および意見交換、地域コミュニティ部会では住民向けリーフレットの内容検討などが行われています。

今後も本計画に記した取組の実践に向けて各部会が主体的に取り組んでいきます。

(3) 顧問、学術アドバイザーおよび協力機関

協議会においては、運営および活動を専門的な立場から様々なかたちでサポートいただく「顧問」、学術アドバイザーおよび「協力機関」を位置づけています。地域資源に関する学術

的な助言や、サイト保全およびガイド養成に関するアドバイス、講座やフィールドワークの講師などについて協力いただいています。

5-2 各主体の役割

本計画の推進にあたっては、協議会が中心となって進めていくこととなりますが、協議会だけでやることは決して多くありません。協議会の構成メンバーを含めた、住民の皆さん、ジオガイド、事業者、教育・研究機関、NPO等各種団体、行政など各主体の協働・連携こそが計画の大きな推進力となるため、関わる各主体の役割を明確にしておきます。

(1) 住民の皆さんの役割

土佐清水ジオパーク構想の主役は住民の皆さんです。住民の皆さんは、自らジオパークや地域の資源に対して興味と探求心を持ち、ジオパークや社会の持続可能性への意識を高めていきます。様々な勉強会や講演会等のイベントジオツアーなどに積極的に参加することで、自分たちが暮らす土佐清水のことをより深く知り、「土佐清水アイデンティティ」を育みます。それによって地域資源を大切に思う気持ちや来訪者をもてなす気持ちも生まれ、ガイド研修や保全活動、商品の開発など、自分にもできることを考え、地域や社会の持続可能な発展に寄与していきます。

(2) ジオガイドの役割

ジオガイドの皆さんは、ジオパーク構想を最前線で支えているといっても過言ではありません。地域内外の人たちに土佐清水のジオパークとしての魅力をしっかりと伝え、土佐清水のファンを増やしていく役割を担います。したがって、より満足度の高いガイドを実施することはもちろん、地域の様々なイベントなどにも積極的に参加し、自らの知見を深めていきます。そして、将来的にはある程度の収入を得てガイドとして自立していくことを目指します。とはいえ、無理なく自分が楽しんでやること、これが最も大切です。

(3) 事業者の役割

特に第一次産業従事者や観光関連事業者は、ジオパークの推進を大きなチャンスと捉え、自らの事業とジオパークのつながりを見つけ、事業を展開していきます。そのためにもジオパークに関する勉強会などに積極的に参加し、事業への活かし方を考えていきます。ジオストーリーに沿った商品の開発やツアーの造成、SDGsの推進などサステナビリティに配慮した事業を実践していきます。土佐清水のファンづくりに貢献するとともに、経済的、社会的な発展を担っていきます。

(4) 教育機関の役割

学校などの教育機関は、副読本などを活用しながらジオパークに関する学習を積極的に取り入れ、実践的に学んでいく機会をつくります。子どもたちが将来的に社会で活躍する

ことを念頭に置き、地球科学的なスケールでの思考力を育み、「土佐清水アイデンティティ」の元となる地域の自然や文化・歴史的な価値を伝え、地域を誇りに思い、未来をつくりだせる人材を育成します。先生方も学習会やジオツアーなどに参加し、自らジオパークに対する知見を深めていきます。

（５）NPO 等各種団体の役割

NPO 等各種団体は、それぞれのミッションにジオパークとの関わりをはじめ、SDGs に係る取組を見出して協力していきます。とりわけ環境保全や観光振興、地域コミュニティや社会福祉にかかわる活動はジオパークとの関わりは深く、ジオパークを活用することで相乗的な効果を生み出すものと考えられます。イベントや学習会の開催、PR 活動など土佐清水ジオパーク構想の魅力を高める様々な活動を実践していきます。

（６）研究機関の役割

研究機関は協議会と連携してジオパークに係る調査研究を実施し、学術情報の充実や学術的な価値の向上を図ります。研究成果は、論文や学会発表のほか、地元での講演会や市報への寄稿など、幅広く公開し、住民の皆さんをはじめとする各主体にその重要性を広く普及させていきます。

（７）行政の役割

国や県、土佐清水市は、土佐清水ジオパーク構想の推進に向けて、ジオパークに関係する環境保全や施設・情報整備、その他関連事業などについて、行政間および他の主体と連携しながら施策の展開を図ります。また、本計画の取組に対する財政的な支援も含め、ジオパーク推進全体のバックアップを担っていきます。

（８）協議会の役割

協議会は、土佐清水ジオパーク構想の中心組織として事務局および４つの部会がそれぞれ進めるべき取組について統括します。

① 事務局

協議会事務局は、協議会全体の円滑な運営管理、様々な取組の進捗管理を行うとともに、自ら具体的な取組を企画立案し、部会や他の主体と協働・連携して実行します。また、周辺地域および他地域ジオパークとの交流の促進を図ります。

② 計画・保全部会

計画・保全部会は、本計画をはじめとする各種計画の策定、組織運営、自然・文化遺産などの保全および維持管理、メンテナンスを担当します。

③ 教育・啓発部会

教育・啓発部会は、各種講演会やフィールドワーク、教材や副読本の作成などを担当しま

す。また、調査研究活動にも携わっていきます。

④ 観光・ビジネス部会

観光・ビジネス部会は、ジオガイドの養成をはじめ、ジオツアーの企画・支援などを担当します。また、ジオに係る商品開発や販売、マーケティングのほか、ジオ看板やパンフレットなどの作成に取り組みます。

⑤ 地域コミュニティ部会

地域コミュニティ部会は、土佐清水ジオパーク構想の周知活動やイベント参加・協力、地域資源を活かした活動などに取り組みます。

5-3 アクションプラン

本計画に記した各取組について、その可視性を高めるため、実施主体と実施時期を明確にしたアクションプランを示します。協議会は、本計画を統括し各取組の進捗について把握していきますが、取組のより具体的な内容については実施主体において検討し、協議会と情報を共有し進めていくこととします。

土佐清水ジオパーク構想基本計画 アクションプラン

| 方針 | 取組 | 具体策 | NPO等 | | | | | | | 協議会部会 | | |
|---------|--|----------------------|-------------------------------|-------|-----|------|------|------|-------|----------------------|------------------------|-------------|
| | | | 住民 | ジオガイド | 事業者 | 教育機関 | 各種団体 | 研究機関 | 土佐清水市 | | | |
| 保全 | ◇サイトの保全 ◇協働・連携によるモニタリングおよび調査研究の実施 | 1 ルールづくり | ジオツアーなどにおける各サイトの利用ルールの明確化 | ○ | | | | | ○ | ○ | 計画・保全部会● | |
| | | | 利用ルールの周知活動 | ○ | | | | ○ | | ○ | 計画・保全部会● | |
| | | 2 モニタリング | 各サイトの定期的なモニタリングの実施とデータの蓄積 | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | 計画・保全部会● |
| | | | 学校との連携によるモニタリング | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | 教育・啓発部会● |
| | | モニタリング成果の報告・発表の機会づくり | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | 計画・保全部会●/教育・啓発部会○ | |
| | | 大学や研究機関との連携強化 | | | | | | ○ | | | 計画・保全部会● | |
| | 3 調査研究 | 調査研究に係る資料の収集および活用 | | | | | ○ | ○ | | | 教育・啓発部会●/計画・保全部会○ | |
| | | 調査研究活動に係る支援 | | | | | | ○ | ○ | | 計画・保全部会● | |
| | 4 住民活動 | 保全活動参画への働きかけ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | 地域コミュニティ部会●/計画保全部会○ | |
| | | 保全活動定着に向けたPR | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ | 計画・保全部会●/地域コミュニティ部会○ | |
| 教育活動 | ◇ジオパーク学習の積極的な展開 ◇ジオパークを楽しみながら学べる機会づくり | 5 普及活動 | 講演会など普及イベントの継続的な開催 | ○ | | | | | | ○ | 地域コミュニティ部会●/教育・啓発部会○ | |
| | | | イベント等でのジオパークブースの設置 | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | 地域コミュニティ部会● | |
| | | | Webサイトの充実及びパンフレットなど広報ツールの活用 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | 観光・ビジネス部会● | |
| | | 6 学びの場づくり | 地元小中学生の体験学習機会の拡充 | | | | ● | ○ | ○ | | | 教育・啓発部会○ |
| | | | 教員向けジオパーク研修会の継続と拡大 | | | | ● | | ○ | ○ | | 教育・啓発部会○ |
| | | | ジオパーク学習プログラムの開発と実行 | | | | ○ | | ○ | ○ | | 教育・啓発部会● |
| | | | 副読本の有効活用 | | | | ● | | ○ | ○ | | 教育・啓発部会○ |
| | | 7 観光人材育成 | ジオガイド養成講座の拡充 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | 観光・ビジネス部会● |
| | 観光事業者とのスキルアップと連携 | | | ● | | ○ | | | | 観光・ビジネス部会○ | | |
| 8 防災・減災 | 災害以降や防災施設などを活用した啓発の推進 | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 教育・啓発部会● | | |
| | 防災・減災を伝える人材の育成 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 教育・啓発部会●/地域コミュニティ部会○ | | |
| 活用 | ◇商品開発やガイドツアー体験などの充実 ◇各種産業との相乗効果 | 9 商品開発 | 体験型ジオツアーの造成と拡充 | | ● | ○ | ○ | | | | 観光・ビジネス部会○ | |
| | | | ジオパークに関する特産品の開発 | ○ | | ● | | ○ | | | 観光・ビジネス部会○ | |
| | | | 地元「食」の販売促進 | ○ | ○ | ● | | | | | 観光・ビジネス部会○ | |
| | | 10 観光振興 | 竜串地区再開発との連携 | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | 観光・ビジネス部会● |
| | | | 広域観光へのジオパークの活用 | | ○ | ● | | ○ | | | | 観光・ビジネス部会○ |
| 11 環境整備 | 各サイト解説板、エリア案内板などの整備促進 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | 計画・保全部会● | | |
| | 各サイトへのアクセスルートの整備促進 | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | 計画・保全部会● | | |
| | インバウンド対応の解説板やパンフレットなどの作成 | | ○ | | | | | | ○ | | 観光・ビジネス部会● | |
| 活気づくり | ◇土佐清水ファンの増加 ◇ジオパークによる交流による地域活性化 | 12 広報活動 | Webサイト、SNS、広報誌などによるジオパーク情報の発信 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | 観光・ビジネス部会●/地域コミュニティ部会○ | |
| | | | 土佐清水ジオパーク構想PRのためのイベント参加 | ● | ○ | ○ | | ○ | | | | 地域コミュニティ部会○ |
| | | 13 拠点づくり | 活動拠点としての竜串VCとの連携 | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 観光・ビジネス部会● |
| | | | フィールドに誘う仕組みづくり | | ○ | ○ | | | ○ | | | 観光・ビジネス部会● |
| | 14 ネットワーク活動 | 国内外のジオパークとの連携促進 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 全部会 | |
| | | 近隣ジオパークとの共同イベントの開催 | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | 観光・ビジネス部会● | |
| | | ジオパーク関係者との交流イベントの参加 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 全部会 | |